

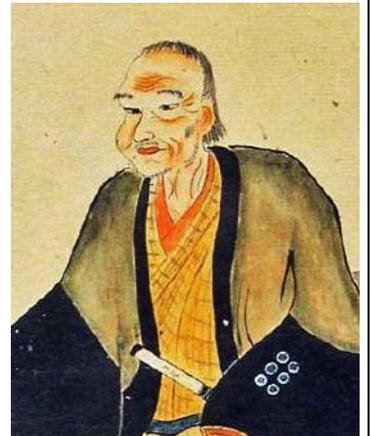
柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌
 住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1
 柿生中学校内
 電話:070-1503-6401,044-988-0004
<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>
 第96号

秀吉の天下統一間近 その時[麻生]で起きた事は(1) =====NHK 大河ドラマ「真田丸」をより深く知る=====

応仁の乱から1世紀が過ぎ、長く続いた戦国の世もようやく一つになろうとする兆しが見えてきた 1582 年、武田氏は滅び、織田信長は明智光秀の謀反で本能寺にて自害。やがて信長に変わって天下統一を進めたのが豊臣秀吉でした。1583 年には難攻不落といわれる大阪城を築き、1585 年には、朝廷より関白(天皇を補佐し政治を行う役職)に任ぜられ、政治の実権を握るようになりました。1587 年にはその権限を使い、「惣無事令」を発し、全国の戦国大名に交戦の即時停止、領土の帰属を秀吉の裁定に委ねるよう命令を出し、九州・四国を平定しました。そのような中、関東では真田昌幸、徳川家康、上杉景勝が秀吉に臣従したことにより信濃・甲斐・上野(こづけ=現在の群馬県)での争いの種は無くなりました。しかし関東の大部分を支配していた北条氏は、上野の沼田(真田氏の領地)の領有についてわだかまりを持ち、秀吉に対して臣従の態度を示さず膠着状態が続いていました。1589 年春ようやく秀吉との交渉が成立し、「◎沼田三万石の地を3等分し3分の2を北条が領有し、残り3分の1に当たる名胡桃(なぐるみ)の地は真田氏の墳墓の地であるから真田領とし、真田が失う3分の2の土地については家康が代償する◎北条氏政・氏直父子のいずれかが速やかに上洛する(秀吉に臣従することを示す)」ということで合意が成立しました。

ところが同年 10 月のこと、沼田城城代となった北条氏邦(3 代北条氏康の 3 男)の家臣、猪俣邦憲が対岸にあった名胡桃城を守備していた真田の家臣、鈴木主水(もんど)を計略にかけ、城を奪ってしまうという事件が起きました。真田はすぐに秀吉に報告。これを受けた秀吉は既に公布されている「惣無事令」に違反するとのことで 11 月 24 日、北条氏直に対して宣戦布告の書状を出しました。さらに傘下の諸大名に命じ、米や雑穀の兵糧を約 20 万石(石油の1斗缶で 200 万個)を集めさせ、馬やその餌になる穀物の準備のため当時の天正大判で 1 万枚(当時の貨幣価値で換算すると約 200 億円以上)を集め、更に軍勢約 21 万人という大軍を結集させました。これに対して、北条の軍勢は、各地から集めた精鋭部隊約 5 万人が小田原城に集まり、態勢を整えていました。北条氏はこの事件が発生する以前から秀吉との交戦があることを予測し、着々と準備をしていたようです。麻生にも関係する事柄がありました。例えば 1584 年(天正 12 年)北条氏直から王禅寺に対し寺領の木や竹を勝手に伐採する事を禁止した書状が送られています。また、北条氏照の守る三輪の沢山城からは多量の焼き米が発見されています。これは沢山城が年貢米の貯蔵施設であったことから、秀吉との籠城決戦のために多くの米が小田原城に輸送される基地であったのではないかと考えられます。それにしても北条氏や真田氏はこの名胡桃城の領有になぜここまで執着したのでしょうか。それは、城の持つ位置が重要なポイントになります。北は上杉の「越後」、南は嘗ての武田・織田の支配した「信濃と甲斐」、東は北条の関東支配の念願の地「上野」でした。現在の群馬県沼田や利根川を挟んだ対岸の名胡桃城は周辺各勢力の接点となる重要な場所でありました。



真田昌幸

真田氏は名胡桃が祖先の墳墓のある地であると主張していますが、この主張は真田氏の戦略の一つであったのではないのでしょうか。真田氏の出自は信濃国小県(ちいさがた)郡を本拠にした国衆(くにしゅう=各地域に根を下ろした土着性の強い在地領主)として実在した滋野一族であると考えられています。したがって「祖先との縁」というよりは、この地域の「地の利」を利用した領土への野心と考えた方が妥当ではないかと思われる。



北条氏直が王禅寺に宛てた木材伐採禁止の通達

(参考資料:「川崎市史」「ふるさと語る」) (文:板倉敏郎)

シリーズ

「麻生の歴史を探る」 第 66 話

小沢城 (3)

小島 一也 (遺稿)

文明十八年(1486)太田道灌は相模国糟屋庄(伊勢原)で、主君の上杉定正に謀殺されてしまいます。道灌の死は扇谷上杉家内部に大きな衝撃を与え、敵対していた山内上杉派はこの機を逃さず戦を挑み、今度は扇谷・山内両上杉家の争乱となり、永正元年(1504)、両上杉勢は多摩川を渡り、丸子、井田、作延、枳形城などを巡り勢力争いの対峙をしています。

この時代、他国の軍勢に領土を蹂躪されていたかに見えるこの地方の地侍の勢力はどうだったのでしょうか。市史などによると、「鎌倉公方、関東管領の衰退は、これに連なる門閥、社寺等の所領を消滅させ、代わって下克上の新しい実力者が台頭、各地に地殻変動を起こした」としており、当時この地の地侍(小領主)は、中原の井田氏、阿久津氏、横山氏、そして稲毛の田島氏、木月の諸西氏、片平の大熊氏などの名が見えます。

横浜では小机の笠原氏、佐江戸の猿渡氏、有馬の持田氏、町田では小山田の薄井氏(新田義貞旧臣)、大蔵の榎本氏(上杉家臣)と、今でもこの地方に後裔の名を残す、多分に農民と関わった地方自治的(村)領主(地侍)が多く、それだけに戦国大乱大勢力の抗争の中、その進退、去就には大変な苦勞があったことでしょう。

この永正元年の枳形城を中心とする扇谷・山内両上杉軍の対峙には、この地の地侍の多くは扇谷上杉に属しますが、道灌亡き後の扇谷上杉勢は奮いません。そこに現れたのが駿河・伊豆に興った伊勢宗瑞(北条早雲)で、扇谷上杉家に味方して、伊豆・駿河の兵を枳形の城に入れ、なお、小沢城から矢野口・関戸で多摩川を渡り、立川原で山内上杉軍を撃滅、敗走させています。この立川原での戦が宗瑞、後の北条早雲の関東進出への第一歩で、又々多摩川矢野口の渡し、小沢城は、新たな戦に晒されることになります。

この伊勢宗瑞(早雲)が扇谷上杉家を助けての戦には、駿河国の守護今川氏(氏親)を伴っていました。そのことは国盗りを意味し、宗瑞(早雲)の関東管領扇谷上杉への協力は実は関東進出への口実で、それを知った敗れた山内上杉(顕定)は援軍を越後の守護上杉房能に求め、扇谷上杉の本拠である武蔵の河越城を囲みます。一方、扇谷上杉家は助けを甲斐の武田家に求めますが、一族抗争の愚を悟った両上杉家は永正二年(1505)和睦し、二十余年に亘った紛争の幕を閉じ、以後、関東上杉勢と、関東制覇を狙う北条氏との戦になります。



小沢城址(南側)入口



北条氏綱の勢力争い関連図

永正十六年(1519)、戦国の驍将【ぎょうしょう＝強く勇ましい大将】伊勢宗瑞(早雲)は伊豆の葦山で死にますが、その子氏綱の活躍は目覚ましく、大永三年(1523)江戸城の上杉朝興を破り関東に勢力を広げます。その戦には丸子、井田、小沢の地域は防衛拠点となり、小机城には笠原氏を城代に置いたと川崎市史に記されています。

だが、上杉方も負けてはいませんでした。当時の管領上杉憲寛は朝興を助け、大永六年(1526)、上野国から南下、北条勢の籠った小沢城を奪い返しています。そのところを川崎市史で見ると、「九月、上杉憲寛上州を発して武州に至り、入間川に陣す、朝興とともに、北条氏綱を討たんと欲し、まず小沢城を攻めてこれを陥る…」とあり、小沢城がまたまた争乱の接点になっていたことが分かります。

参考文献:「川崎市史」「横浜市史」「読める年表 日本史」(図・写真は編集者挿入)

【訂正】 前号第95号の当欄における図「長尾景春の乱」で、小沢城の位置が間違っておりました。その場所は津久井城です。小沢城の正しい位置関係は上図「北条氏綱の勢力争い関連図」をご参照ください。

シリーズ

時間と時計の話 第2部

時計と時間の観念(2)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

◆懐中時計の謎◆

実は時計は、海洋航海に欠かすことのできない大切な品だったのです。また話が遡りますが、1492年にコロンブスが初めて大西洋横断航海に乗り出した時、船に大きな砂時計が据えられていたことが、『コロンブス航海誌』に記されています。即ち航海と時計は切っても切れない関係にあったのです。ガリバーもまた航海に欠かせぬ道具として、懐中時計を肌身離さず持ち歩いていたのです。ところで史上初めて懐中時計が作製されたのは、17世紀の後半だったのですが、当初は誤差が大きく、1日に30分程の遅れが当り前の製品だったのです。そのため当初は上流階級の装身具のように扱われていたのですが、1675年頃にオランダで、精度が飛躍的に高い時計が開発され、一躍オランダがヨーロッパ時計工業の中心地に踊り出たのです。こうして1日の誤差は5分以内となり、修正可能な範囲に落ち着いたのです。1699年に出航したガリバーが大事に持っていたのも、このオランダ製の懐中時計と考えて良いでしょう。

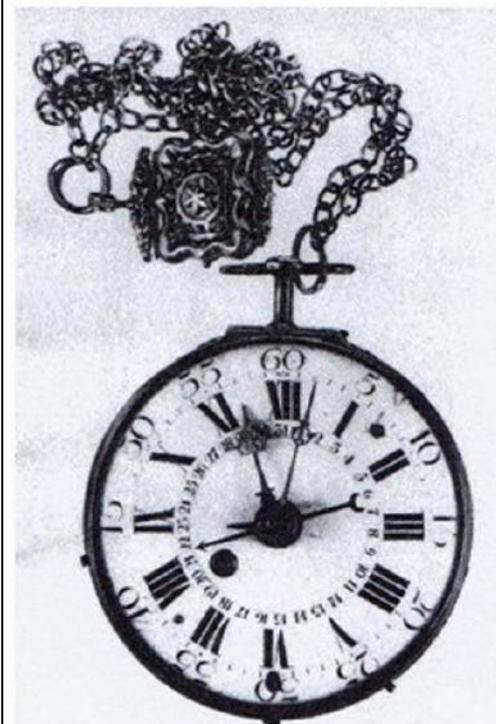
もうひとつ例を出しましょう。元禄3年~5年(1690~92年)にかけて日本に滞在した、オランダ東インド会社のお抱え医師ケンペルは、「日本滞在記」という長文の日本紹介記録を残しました。この記録が『日本誌』と題する本文5巻と付録からなる大著となって、オランダで出版されたのです。この中に、彼が將軍を表敬訪問するために、江戸に上った時の記録「江戸参府日記」も含まれています。

この旅に、ケンペルもまた完成間もない懐中時計を大事に持っています。江戸城で將軍綱吉に拝謁した時、ケンペルは西洋の剣やタバコのパイプなど、日本人が珍しがりそうな品を見せて、列席した人々の気を引いているのですが、列席者が最も興味を寄せたのは、小人国の小人たちと同じように懐中時計だったと記しています。とりわけ同席を赦された大奥の女性たちは、時計を部屋の外まで持ち出し、不思議そうに眺めたり、耳にあててカチカチという音を聞いたりしていたと、なかば得意気に記しています。さてケンペルは、この時計で何をしていたのでしょうか。彼の旅日記を覗いてみましょう。

「3月2日金曜日。我々一行は籠に乗って京都を離れた。一緒に宿を出た主人は、京都から1時間程の距離にある町外れの料亭に我々を招いた。……ここで我々は1時間を過ごし、長々と続く日岡村を過ぎると、15分で岩茶屋村に至り、そこから間もなく追分村に着くが、この村は400戸ほどの長い町並みを有し、通り過ぎるのに半時間ばかりかかった。」

ケンペルは、京都から1里の距離と言った我々に馴染の表現を用いず、距離を時間で表しています。今でこそ「駅から〇〇分」といった不動産の広告がありますが、江戸時代の日本には、距離を時間で表す習慣はありませんでした。ケンペルは籠に揺られて旅をしながらか、懐中時計を常に見て、夫々の地点の距離を時間で表記していたのです。それも15分単位の時間で測っていたことがわかります。彼は、時間を距離に換算するすべに長けていたのでしょうか。おそらくガリバーも船の中で同じことをしていたのでしょうか。時報の1時間の外に、15分という時間が大切だった理由が見えてきました。

ケンペルは、京都から1里の距離と言った我々に馴染の表現を用いず、距離を時間で表しています。今でこそ「駅から〇〇分」といった不動産の広告がありますが、江戸時代の日本には、距離を時間で表す習慣はあり



ケンペルの所持した時計と
同型の懐中時計

ありませんでした。ケンペルは籠に揺られて旅をしながらか、懐中時計を常に見て、夫々の地点の距離を時間で表記していたのです。それも15分単位の時間で測っていたことがわかります。彼は、時間を距離に換算するすべに長けていたのでしょうか。おそらくガリバーも船の中で同じことをしていたのでしょうか。時報の1時間の外に、15分という時間が大切だった理由が見えてきました。

そうなんです。時計は距離を測る上で、欠かせない道具だったのです。砂時計を利用したコロンブスも、 α の方角へXノットで、B時間進んだなどと、航海日誌に記しています。

ガリバーの話に戻しましょう。遭難地点はこう書かれています。「我々の船は、ブリストルから東インドへの航海中、ひどい嵐に遭ってバン・ディー・マンズ・ランドの北西方まで流された。天体観測の結果、我々の位置は、南緯30度2分にあることが分かった。」ガリバーは、船の位置を示すのに、緯度だけを記して、経度を記していないことに注目してください。緯度だけでは船の位置は決められません。船の位置が決められなければ、当然その分危険も増えます。何故緯度は測れて経度は測れなかったのか。それは古来からの天体観測の発達によって、緯度は早くから比較的正確に測定出来たのですが、経度の測定は難しかったからなのです。

(続)



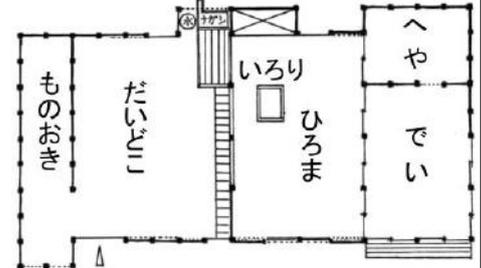
小人国に辿りついたガリバーと小人たち

川崎市立日本民家園に移された麻生の歴史 1 旧金程村の旧伊藤家住宅



昭和40年3月解体完了、同年10月に復原完了し、民家園移築第一号となった記念碑的建物で、国の重要文化財に指定されています。もとは金程にあったもので、伊藤家が手放すことにした当初は川崎市にまだ文化財保護の機運が乏しく、横浜の三溪園に移されることが決まっていた。それをひっくり返した第一号だけあって、民家園の中でもひとときわ落ち着いた雰囲気の中に建っています。

築後300年程経っていると考えられていますが、できるだけ当初の姿に戻す方針のもとに復原された姿は、必ずしも大きい部類には入らないとはいえ、やはり金程村の名主(と言われている)の名に恥じない均整の取れた美しさを持っています。特に東日本の農家には比較的珍しい入母屋造(煙出しとしている)となっているのもその権威の象徴といえるのではないのでしょうか。ちなみに江戸時代は分相応が厳しく要求され、農家の入母屋造も藩によっては禁止されているところもありました。



平面図で、「ものおき」「だいどこ」は土間ですが、「ひろま」は『竹すのこ』の床となっています。この形は全国的に珍しくはありませんが、特に神奈川ではよく見られたようです。やはり日本の住宅は夏を基準に作られていた、ということが納得されます。もちろん板床・畳敷きに対しても厳しい規制があったこともありますが、

「ものおき」は主として味噌樽、醤油樽の貯蔵場所として使われました。

柿生郷土史料館催物案内 【入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月4回)

5月 8・22・29日(毎日曜日) **6月** 4・11・18・25日(毎土曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時 (5月15日は休館です)

いよいよ開講！史料館古文書の会 第4弾 「続 古文書輪読会(全10回)」

開催日 5月26日～11月10日 (第2,4木曜日 ただし8月はお休み)

時間 午前10時～12時

会場 柿生郷土史料館特別展示室

進行形式 受講生同士の4人グループで、互いに啓発しあいながら読み進める

教材 志村家文書を中心とした旧柿生村に伝わる古文書

第10回 特別企画展

新聞で見る近代日本の歩み展(3)

～ 関東大震災と横浜・川崎 ～

大正12年の関東大震災から93年を経て、震災の生の記憶が薄れてきました。そこで、当時の新聞報道から、被害の程度や対応を含めて、震災の様子を再現します。

期間: 2月27日 ～ 5月29日 会場: 柿生郷土史料館特別展示室

ついに完成！

ふるさと柿生の記憶をDVD化

第1弾

「身近にあった信仰の世界と人々の思い」

◆◆◆晩秋の上麻生「秋葉講」を訪ねて◆◆◆

ご希望の方にはおわけしております。詳しくは史料館までお問い合わせください。